

養育態度の認知が中学生の精神的健康に与える影響

—生徒と養育者双方の認知を通して—

13014PCM 村林志野

問題と目的

中学生という時期は、第二性徴を迎える上に、精神面においても様々な発達課題や危機に直面しやすい。さらに小学生の時と比べ、様々な生活場面における変化を体験しやすいことから心理的に不安定になりやすく、悩みを抱えやすいといえよう。そのような環境が変化する中で、生徒の変化への適応を支える中心となるのは家族であると考えられ、特に中学生の多感な時期において重要な存在になるのではないだろうか。母親の生徒に対する考え方や直接的な接し方を包括した養育態度である Baumrind

(1967) の「応答性」・「統制」の二次元を用いて、本研究では、養育者の養育態度における応答性の高・低と統制の高・低がどのように中学生またその養育者自身に認知され、その認知の違いがその生徒の精神的健康にどのように影響するかということを検討する。中学生期においては、家族関係、親子関係は緊張と葛藤に満ちており、気分の動揺や、思考の混乱など、心理的均衡を崩しやすい。つまり“情緒の状態は、均衡というより不均衡を経験するのが一般的である(久世・平石, 1992, p.77)”ことから、養育者から自律・分離を図る一方で、まだ甘えていたいという葛藤を乗り越えようと心理的均衡を崩しやすくなる。その際に退行は避けられないことであり、その時期に養育者からの応答的な養育を受けていないと生徒が認知することは、生徒にとって養育者から拒否された傷つきとして残ると考えられる。このことから、精神的健康度は以下のような組合せの順に低くなると考えられる。応答性の高・低の認知の組み合わせは、 $2 \times 2 = 4$ 通りの組み合わせが考えられ、応答性が高い(養育者)×応答性が高い(生徒)、応答性が低い(養育者)×応答性が高い(生徒)、応答性が高い(養育者)×応答性が低い(生徒)、応答性が低い(養育者)×応答性が低い(生徒)の順になるであろう。

性が低い(養育者)×応答性が低い(生徒)の順になるであろう。また、養育者の統制が高いと生徒が認知している群においては、自分の考えや思いによって自発的に行動することが少なくなり、生徒の自尊心が保たれにくくなる(中道, 中澤 2003)。このことから生徒自身の行動が受身的になり、自信が持てず、精神的健康度は低くなると考えられる。このことから、精神的健康度は以下のような組合せの順に低くなると考えられる。統制の高・低の認知の組み合わせも、 $2 \times 2 = 4$ 通りの組み合わせが考えられ、統制が高い(養育者)×統制が高い(生徒)、統制が高い(養育者)×統制が低い(生徒)、統制が低い(養育者)×統制が高い(生徒)、統制が低い(養育者)×統制が低い(生徒)の順になるであろう。

方法

調査対象者：A 県内の公立 B 中学, C 県内の公立 D 中学に通う中学生とその養育者を対象に調査を行い解答に不備のあったものをのぞいた 302 名(生徒 151 名, 養育者 151 名)を分析対象者とした。

調査手続き：A 県内中学校は 2014 年 11 月 11 日, C 県内の中学校は 2014 年 11 月 25 日にそれぞれ帰りの HR の時間に生徒に本人の分と養育者の分を配布し, 学校の担任が回収する方法で実施した。

質問紙構成：フェイスシート, 養育態度尺度(親の養育態度尺度(中道・中澤(2003))を中学生用とその養育者用に加筆, 変更した尺度), 中学生版精神健康調査票(JHQ-12)(井上(2012))が GHQ12 短縮版 12 項目を中学生用に加筆変更したもの)から構成された。

結果と考察

養育者の養育態度尺度(生徒実施版), 養育者の養育態度尺度(養育者実施版), 中学生版精神健康調査票(JHQ-12)について有意な男女差は

みられなかった。学年では養育者の養育態度尺度(生徒実施版)の「子の認知する応答性」において有意な学年差がみられた($F(2,148) = 4.212, p < .05$)。多重比較をおこなったところ、2年生の方が3年生よりも応答性が有意に高かった。2年生は精神的に不安定な時期でもある(上地・荒井・渡邊・市村, 2014)ことから、養育者が生徒を心配し、より一層生徒に対して多く関わろうとする時期だと言えるのではないだろうか。中学2年生という時期は学校生活において、なかなか馴染めなかった仲間とも次第に距離が近くなり、部活動では中心となる機会が多くあることなどから、学校が中心の生活になる。そのため、反抗的な態度をとる一方で、養育者の協力や支えが必要となり、コミュニケーションをとる機会が自然と増えるのではないだろうか。

3年生を子にもつある母親は「3年生になり、自分の部屋にこもり勉強をする時間が増えました。寂しいなどは思いつつ、今は一緒に過ごす夕食の時間を大事にしています」と感想欄に記述している。3年生においては学校や授業、受験勉強、塾などといった個人で勉強をする時間が多くなり、親とのコミュニケーションの時間が少なくもなる。また、高等学校への進学を目標とすることで勉強を通して自分の実力をあげるにより親からの自律を図ろうとするのではないだろうか。これらのことから、今までの親との関係と親からの影響を変化させるきっかけとなるであろう。それに伴い学業面でのストレスが高まるが、仲間と勉強をしたり仲間と過ごす時間が多くなることで、家族とのコミュニケーションをとる時間の占める割合が、2年生よりも少なくなるのではないかと考えられる。

これらのことから2年生の方が3年生よりもコミュニケーションをとる時間が多く「子の認知する応答性」が高くなったのだと考えられる。

次に、養育態度を生徒がどのように認知しているか、同様に、養育者自身がどのように養育態度を認知しているかについて、中央値をもとにそれぞれが認知する応答性が高い群・低い群、統制が高い群・低い群に分類した。それらを独

立変数、中学生版精神健康調査票(JHQ-12)得点を従属変数とした二要因分散分析を行った結果、精神的健康度に有意な差はみられなかった。このことから仮説は支持されなかった。

次に、養育者の養育態度尺度と中学生版精神健康調査票(JHQ-12)の各下位尺度との相関係数を算出した結果、養育者の養育態度尺度(養育者実施版)の下位尺度「養育者の認知する応答性」と「養育者の認知する統制」の間に有意な正の相関($r = .172$)、また養育者の養育態度尺度(生徒実施版)の下位尺度「子の認知する応答性」と「子の認知する統制」の間に有意な正の相関($r = .387$)がみられた。生徒においても養育者においても「応答性」と「統制」との間に相関がみられたことから、「応答性」と「統制」との区別がされにくいのではないかと考えられる。このことから、本研究で使用した尺度は、生徒にとってはどれくらいのかかわりを養育者からもってもらっているか、養育者にとっては生徒とどれくらいのかかわりをもっているかを表していると推察できる。

今後の課題

本研究では、中道・中澤(2003)が作成した親の養育態度尺度22項目を、中学生と養育者用に加筆変更したが、養育者の養育態度尺度が養育者実施版と生徒実施版では相関がみられなかったことから、それぞれが異なる尺度になってしまったと考えられる。また「養育者の認知する応答性」と「養育者の認知する統制」に有意な相関が示され、「子の認知する応答性」と「子の認知する統制」にも有意な中程度の相関が示されたことから、Baumrind(1967)の「応答性」・「統制」を十分に区別して測ることができなかったと考えられる。そのため、尺度の項目についても、中学生に適した内容になるよう、さらなる検討が必要である。また、対象者の家族構成や家族背景、また対象者以外は家族の雰囲気などをどのように感じているか等を考慮した上での検討も必要であると考えられる。

本研究で用いた Baumrind (1971) のみならず、Schaefer(1965)の3次元を仮定した養育態度など、異なる視点での研究も必要であろう。